

## 研究における質的と量的

松 寄 英 士（東京女子医科大学看護学部）

### はじめに

一般に自然科学における研究では、何らかの仮説を立て、それを検証したり棄却したりすることによって科学的な知識を蓄積し、拡大していく方法がとられる。この自然科学的アプローチをとる領域では、実証的な量的研究以外の方法はないであろう。しかし近年、人間科学と称される領域、さらに保健医療分野では、数量化することができない事象の解明を目指す質的研究が取り上げられ、大きな広がりを見せている。

こうした2つの研究法は、さまざまな経緯のなかで激しく対立することも多いが、それぞれの方法はどう異なるのであろうか。また、両者の統合はあるのであろうか。

### 質的研究と量的研究の違い

「質的研究とは何か」という質問に明解な回答を示すのは困難である。質的研究は、多くの異なる分野で、さまざまな解釈がなされ、多種多様な研究法が紹介されているからである。しかし、敢えて定義するならば、無藤（2004）が述べるように「量的な研究ではないもの」という答えは、安易であるが、実用的に役立つものであるとの回答は的確なものであろう<sup>1)</sup>。

量的研究が考察の対象となる事象を数量化して処理するのに対して、質的研究は言語あるいは言語に変換されたデータとして処理、分析される。量的研究は「仮説検証」に向いており統計学的分析を用いることが多いのに比べて、質的研究は一般的に仮説を明確にする「仮説生成」に向いており、グラウンデッド・セオリー、ナラティブ・アプローチなどさまざまな方法に基づいて分析が進められる。そして質的研究法をめぐる議論は「ポストモダニズム」、「社会構築主義」などの社会思想の歴史と共に発達した経緯を持つために、大変複雑である。

### 質的研究と量的研究の対立を越えて

研究を行う者は、なぜそれぞれの方法をとるのかを自分の研究の中ではっきり意識している必要がある。同時に、自らの方法だけを信奉する方法主義に陥ることは避けなければならない。研究方法は目的に応じて選ばれるものだからである。

特に質的研究ではさまざまな方法がとられるが、これは何でもありということではない。その研究から、「なるほど、確かにそうだ」との信憑性のある（公共性のある）知見を得るためには、データに基づいてどの部分からどういう解釈をしたのか、その根拠を示しながら解釈を提示していくことが必要であろう<sup>2) 3)</sup>。

また近年、質的研究と量的研究の双方を組み合わせた「トライアンギュレーション」と呼ばれる方法も推奨されており、こうした研究方法も重要となってくるであろう。

#### 引用・参考文献

- 1) 無藤隆（他）「質的心理学」新曜社（2004）
  - 2) 西条剛央「ライブ講義 質的研究とは何か」新曜社（2007）
  - 3) 西条剛央「看護研究で迷わないための超入門講座」医学書院（2009）
-